

「不確実な時代の最前線で」

—新たな「人と野生動物の関係」を創造するために—

1. はじめに——昨年の出来事に思いを致し、迎えた新春

明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。また、平素より弊社の活動に対し、多大なるご支援とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。新しい年を迎え、私たちは改めて襟を正し、我々に課せられた社会的使命の重さを再確認しなければなりません。昨年の出来事は、これからの日本の野生動物保護管理のあり方を問い直す、一つの転換点であったと私は捉えています。

昨年、私たちの記憶に強く刻まれたのは、全国各地で相次いだ「クマの市街地出沒」でした。市街地への出沒と人身被害、そして連日報道されるこれまであまり目にしたことのないような現場の映像。それは、長年この分野に携わってきた私たちにとっても、これまでの経験だけでは理解できないものでもありました。令和5年度のクマによる人身被害が当時の過去最多となったことなどを受け、人の日常生活圏に出沒した危険鳥獣への迅速な対応を可能とするため、鳥獣保護管理法が昨年9月に施行され、実際に複数の自治体で制度に基づいた捕獲が行われました。しかし、この緊急銃猟は市町村長の判断により行われることや安全管理のためにも実行体制の検討が事前に必要であるため出沒を想定した訓練が必要であり、弊社としても複数の市町村の訓練業務に関わらせてもらいました。このような市街地出沒が毎年同じ程度で発生するとは限りませんが、私の中ではこれまでのクマの動きとは違うものを感じた一年でもありました。

2. 「常識」の崩壊——クマは変わったのか

私はこれまで、野生動物保護管理の専門家として、あるいは現場を知る実務家として、同じ場所であれば「動物の基本的な生態や行動様式」というものは、

人による積極的な介入がない限り経年的にそうそう大きく変わるものではない」という認識を持っていました。しかし、昨年のクマの出沒状況は、私が知る従来のクマの生態や行動パターンに照らし合わせて、理解しがたいものでした。これまで出沒しなかった場所への進出、人を恐れない行動を目の当たりにし、私はもう一度クマの行動の変化ではなく環境の変化に立ち返る必要がありました。変わったのは、おそらく彼らを取り巻く「環境」と、私たち「人間社会」の方なのではないかと。

過去の生物多様性国家戦略において、日本の自然環境における危機の一つとして「里山の崩壊」が指摘されてきました。かつて、人の生活圏と奥山の間には、手入れされた里山という「緩衝地帯（バッファゾーン）」が存在していました。しかし、近年では地方の過疎化と高齢化に伴い、里山は放置され、藪化し、その境界線は消失しました。また、放置された里山にはカキやクリの木が残っていて、クマをはじめとする野生動物にとっていい餌となっているのは事実です。

昨年の出来事は、長年危惧されてきたこの「人と野生動物の境界線の消失」が、いよいよ限界点を超え、現実の脅威として噴出した結果であると考えべきなのかもしれません。里山地域の人口減少や土地利用の変化は、一朝一夕に解決するものではなく、今後も進行していきます。つまり、私たちは今、「過去のデータや経験則が通用しない、予測困難な変化が常態化する時代」に突入したといえます。これまでの常識が通用しない以上、私たちのアプローチもまた、根本的なアップデートを迫られます。

3. 錯綜する情報の中で——現場を知る者の責務

こうした構造的な変化の中で、私が強い危機感を抱いたもう一つの点が「情報の扱い方」です。昨年のクマ報道を振り返ると、センセーショナルな被害

状況ばかりが強調され、科学的根拠に乏しい憶測や、極端な駆除論・保護論が交錯していました。社会全体が不安に包まれる中で、正しい知識や、地域の実情に即した適切な対応方法が十分に伝わっていない。そのもどかしさを、現場に近いところで活動する私たちは痛感しました。

現場を知らないコメンテーターの言葉ではなく、泥臭く山に入り、痕跡を追い、地域住民の声を聞いてきた私たちこそが、発信すべき「真実」を持っています。クマに限らず野生動物に対して、「正しく恐れ、正しく守る」ための知識を社会に浸透させることは、これからの私たちにとって、調査・管理業務と同等、あるいはそれ以上に重要な責務となります。不安を煽るのではなく、データを元に具体的な解決策を提示する。今後は、これまでと同様にデータに基づいて現場の状況を理解することに加えて、正しい情報を発信することにも意識して取り組んでいきたいと考えています。

4. 本年の指針——地域全体で「行政委託」を超えた課題解決へ

まずは昨年のクマの市街地出没への対応が今年から本格的に始まるという認識でいますので、昨年の緊急対応という「対症療法」から、本年は「根治治療」に向けた土台作りの年になると思います。その部分にはこれまで培った技術力や経験を生かして、科学的根拠に基づいた管理計画の策定に寄与していきたいと考えています。当然ですが、他の獣種への取組みもこれまでと同様に継続し深化を目指します。

また、これまで私たちの業務は、行政からの委託事業が中心でした。しかし、野生動物の問題がこれほどまでに複雑化・社会問題化した今、野生動物問題はもはや行政だけの課題ではなく、地域コミュニティ全体に関わる「地域課題」であると捉えています。したがって一昨年度組織した地域支援室を中心に、地域の多様なステークホルダー（利害関係者）と連携し、地域全体で問題を解決する枠組み作りを目指します。さらには、受託事業にとどまらず自主事業にも力を入れていきたいと考えています。野生動物問題に関して、自ら社会に問いかけ、人々を巻き込んでいける組織を目指したいと考えています。

5. 職員への期待——「俯瞰する眼」と「機微を捉える感性」

最後に、共に働く社員の皆さんに期待することを述べます。先述の通り、私たちは今、予測の難しい変化の中にいます。マニュアル通りの対応が正解とは限らない場面に、これからも数多く遭遇するでしょう。そのような中で皆さんに求められるのは、相反する二つの視点を同時に持つことです。

一つは、社会全体の動向、国の政策、気候変動や生態系の推移といった、物事を高い視点から大局的に見る「俯瞰（ふかん）する眼」です。今、目の前で起きている事象が、大きな流れの中でどのような意味を持つのかを考える力です。もう一つは、現場の空気感、動物の行動、地域住民の生活、そういった細かな変化を感じ取る「機微を捉える感性」です。俯瞰して地図を描きながら、現場の機微を捉えて地域にあった提案をする。この両輪があって初めて、複雑な野生動物問題に対して適切な取り組みを実施することができます。決して容易なことではありませんが、現場の最前線にいる皆さんにしかできないことです。社会の変化に柔軟に対応しつつも、芯の部分では「人と野生動物の適切な関係性を目指す」という熱意を絶やさないでいただきたい。その情熱こそが、私たちの組織の最大の資産であり、社会からの信頼の源泉です。

6. 結びに

「里山」というかつての緩衝地帯が機能を失いつつある今、私たちは人と野生動物の新しい関係性を築いていかなければなりません。私たちも微力ながら貢献し、持続可能な社会への道筋を作りたいと思います。変化を恐れず、むしろこの変化を、組織として、そして社会全体として成長するための好機と捉え、全力を尽くしてまいります。本年が、皆様にとって実り多き一年となりますことを心より祈念し、年頭の挨拶といたします。

令和8年 元旦

株式会社野生動物保護管理事務所
代表 奥村 忠誠